

～おわりに～

## 常陽地域研究センター解散にあたっての 皆様への感謝とこれからへの決意

一般財団法人 常陽地域研究センター 理事事務局長 大和田 基



常陽地域研究センター(常陽アーク)機関誌「JOYO ARC」の最終号はいかがでしたでしょうか。

大学生の地域の未来へ向けた提案、当センターがこれまでお世話になった識者の方々から寄せられたそれぞれのジャンルでの論考。当センターの調査機能は4月から発展的に常陽産業研究所に引き継がれますが、いずれも新体制での実践的調査に参考となる示唆に富んだ内容でした。

なかでも今回の懸賞論文募集ははじめての試みでしたので、どのような内容の論文が集まるか心待ちにしていました。

「いばらきの未来」を担う若者が、自分の住む地域をどのような眼でみて、何が課題と感じ、どのような展望を持っているのでしょうか。歳を重ねたせいか、自分の子どもぐらゐの年齢の若者が何を考えているかにはひととき興味がかかります。

応募作品は、防災・減災、公共施設再編、子どもが創る未来、お祭りを通じた地域づくり、実体験を通じた人づくりの有用性など多岐にわたり、今後の「いばらき」を考えるうえで、地域で学ぶ若者の着眼点には大いに期待が持てると感じました。

さて、当センターは3月末に財団50年の歴史に幕を下ろします。

“産業開発から地域研究”へ。当センターが長年行ってきた調査・研究は、地域を取り巻く環境変化と地域の特性・実態を常に反映しつつ、あるべき姿を意識したものでした。

あらためて1969年(昭和44年)創刊号からの機関誌「ニュー茨城」、1996年常陽産業開発センターから常陽地域研究センターへと財団名称変更後の「JOYO ARC」をめくってみると、そこからは、地域の歩み、変わりゆく姿、抱える課題の大きさが、研究員の問題意識を持った調査研究、数多くの関わってくださった方々の声や論考を通して伝わってきます。

ある意味、当センターが残した大きな財産の一つは、研究員に加え、行政、経済界、学会、経営者などの幅広い人脈なのか

もしれません。当センターにはその人脈をつなぐプラットフォーム的役割を担うことが期待されていたと感じます。

私は、産業開発センターから地域研究センターへと時代の流れが大きく変わる過渡期に研究員として身を置いた経験がありますので、なおさらその思いには強いものがあります。当センターは地域の大学との研究会、紙面を通じた識者の交流など、多くの「場」を提供してきましたが、一面では、地域が抱える課題の複雑化、高度化が著しく、もっともっと幅広い知見、多面的な連携、調査研究手法・体制の見直しが必要となっていることも実感していました。

4月からは、一般財団法人常陽地域研究センターと株式会社常陽産業研究所が実質的に統合して、新たな調査・研究体制がスタートを切ります。

そこでは、地域の課題を解決して展望を切り開くために、より実践的な調査及び手法が求められることとなります。基礎調査で把握した地域の実態と将来展望について、個々のテーマに展開し、個別事情を勘案した解決手段に落とし込んでいくということです。

もちろん、金融面のみならず、行政、大学、研究機関、支援機関など様々な方々との連携がこれまで以上に必要となるでしょう。まさにプラットフォームの実践です。これを好機ととらえ、当センターが長年の調査で蓄積してきた思想やノウハウ、人脈をベースとして、より地域に貢献できる調査活動を実践したいと考えます。

最後に、これまで当センターの事業に様々な形でご支援ご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げるとともに、今後の実践的な調査活動への大きな期待に沿えるよう研究員一同努力して行くことをお誓いして締めとさせていただきます。50年間誠にありがとうございました。そして、今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。